

宮崎県感染症週報

宮崎県健康増進課感染症対策室・宮崎県衛生環境研究所

宮崎県第51週の発生動向

全数報告の感染症 (51 週までに新たに届出のあったもの)

1 類感染症：報告なし。2 類感染症：結核 4 例。3 類感染症：報告なし。
4 類感染症：つつが虫病 2 例。5 類感染症：侵襲性肺炎球菌感染症 1 例、百日咳 10 例。

	疾患名	報告保健所	年齢群	性別	病型・類型	症状等
2類	結核	宮崎市	50 歳代	女	肺結核	咳
		延岡	50 歳代	女	肺結核	咳、痰、体重減少
		日南	70 歳代	男	肺結核	咳、痰、発熱
		日向	50 歳代	男	無症状病原体保有者	—
4類	つつが虫病	宮崎市	70 歳代	女	—	発熱、発疹、倦怠感
		都城	60 歳代	男	—	発熱、刺し口
5類	侵襲性肺炎球菌感染症	宮崎市	60 歳代	女	—	発熱

	疾患名	報告保健所	報告数	年齢群		症状
				5~9歳	10歳代	
5類	百日咳	都城	4例		4	持続する咳、夜間の咳き込み、ウープ、嘔吐
		日南	1例	1		
		高鍋	5例	3	2	

定点把握の対象となる5類感染症

・定点医療機関からの報告総数は1,039人(定点当たり30.9)で、前週比124%と増加した。なお、前週に比べ増加した主な疾患はインフルエンザと伝染性紅斑で、減少した主な疾患は手足口病である。

★インフルエンザ・小児科定点からの報告★

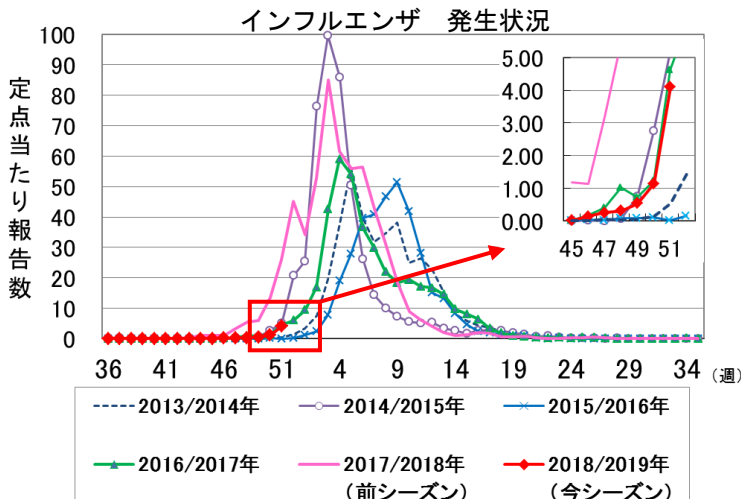
【インフルエンザ】

報告数は242人(4.1)で、前週比357%と増加しており、例年同時期の定点当たり平均値*(8.5)の約0.5倍である。宮崎市(7.9)、小林(5.6)、中央(5.5)保健所からの報告が多く、年齢群別は5~9歳が全体の約4割を占めている。

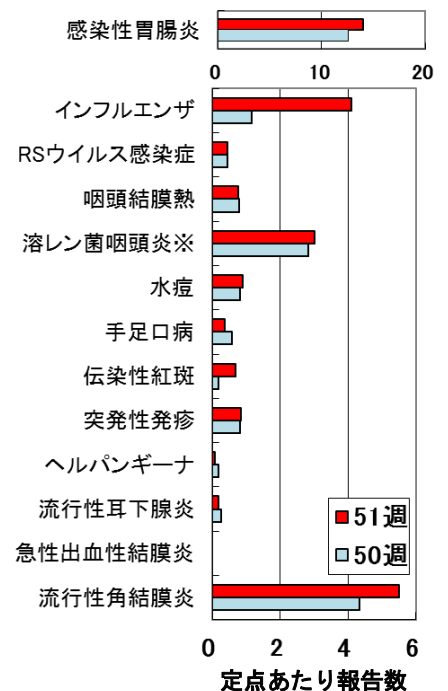
【感染性胃腸炎】

報告数は503人(14.0)で、前週比111%と増加しており、例年同時期の定点当たり平均値*(17.6)の約0.8倍である。小林(31.3)、日南(20.3)保健所からの報告が多く、年齢群別は1~3歳が全体の約4割を占めている。

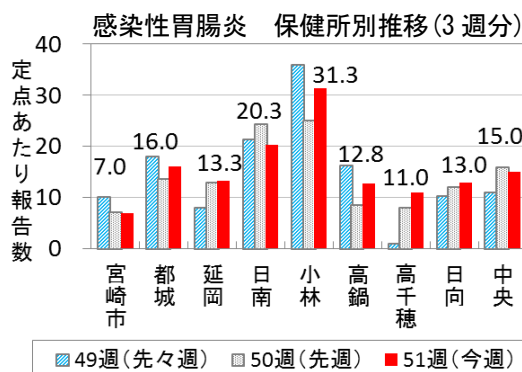
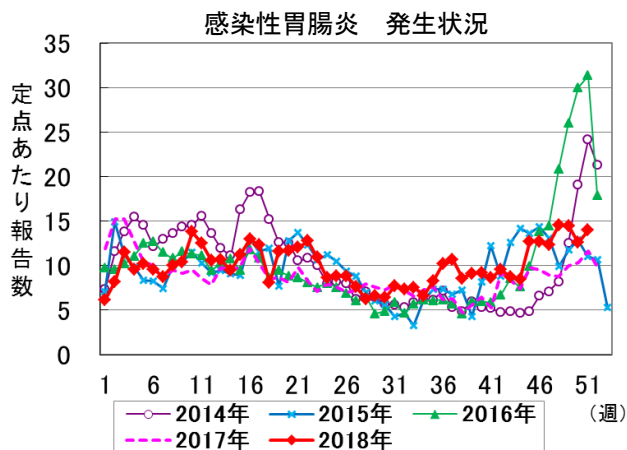
* 過去5年間の当該週、前週、後週(計15週)の平均値



《前週との比較》



※A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



★基幹定点からの報告★

○感染性胃腸炎(ロタウイルス)：高鍋保健所から1例報告があった。60歳代であった。

★保健所別 流行警報・注意報レベル基準値超過疾患

保健所名	流行警報・注意報レベル基準値超過疾患
宮崎市	水痘(1.0),流行性角結膜炎(10.7)
都城	なし
延岡	水痘(2.3)
日南	感染性胃腸炎(20.3),水痘(1.3),伝染性紅斑(4.0)
小林	感染性胃腸炎(31.3)
高鍋	なし
高千穂	なし
日向	水痘(1.0)
中央	水痘(2.0)

* 流行警報レベル開始基準値 *

- ・感染性胃腸炎(20.0)
- ・水痘(2.0)
- ・伝染性紅斑(2.0)
- ・流行性角結膜炎(8.0)

* 流行注意報レベル基準値 *

- ・水痘(1.0)

🇯🇵 全国 2018 年第 50 週の発生動向

□ 全数報告の感染症 (全国第 50 週)

1類感染症	報告なし					
2類感染症	結核	338 例				
3類感染症	細菌性赤痢	12 例	腸管出血性大腸菌感染症	24 例		
4類感染症	E型肝炎	10 例	A型肝炎	9 例	重症熱性血小板減少症候群	1 例
	チクングニア熱	1 例	つつが虫病	30 例	デング熱	4 例
	日本紅斑熱	1 例	レジオネラ症	18 例		
5類感染症	アメーバ赤痢	13 例	ウイルス性肝炎	3 例	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	29 例
	急性弛緩性麻痺	5 例	急性脳炎	11 例	クロイツフェルト・ヤコブ病	5 例
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	7 例	後天性免疫不全症候群	24 例	侵袭性インフルエンザ菌感染症	8 例
	侵袭性髄膜炎菌感染症	2 例	侵袭性肺炎球菌感染症	57 例	水痘(入院例)	12 例
	梅毒	98 例	播種性クリプトコックス症	1 例	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	2 例
	百日咳	287 例	風しん	116 例	麻しん	1 例

□ 定点把握の対象となる 5 類感染症

定点医療機関当たりの患者報告総数は前週比 109%と増加した。なお、前週と比較して増加した主な疾患はインフルエンザと咽頭結膜熱で、減少した主な疾患はヘルパンギーナである。

インフルエンザの報告数は 16,589 人(3.4)で前週比 197%と増加しており、例年同時期の定点当たり平均値*(4.7)の約 0.7 倍である。北海道(9.6)、愛知県(8.4)、香川県(7.1)からの報告が多く、年齢群別では 5~9 歳が全体の約 4 割を占めている。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告数は 9,362 人(3.0)で前週比 96%とほぼ横ばいで、例年同時期の定点当たり平均値*(2.8)の約 1.1 倍である。北海道・新潟県(各 5.3)、福岡県(5.1)からの報告が多く、年齢群別では 4~7 歳が全体の約 5 割を占めている。

* 過去 5 年間の当該週、前週、後週(計 15 週)の平均値

宮崎県 感染症情報

(72定点医療機関)

2018年 第51週(12月17日～12月23日)

疾病名		第50週	第51週	宮崎市	都城	延岡	日南	小林	高鍋	高千穂	日向	中央
インフルエンザ	報告数	68	242	127	31	14	18	28	12	1		11
	定点あたり	1.15	4.10	7.94	3.10	2.00	3.60	5.60	2.00	0.50	0.00	5.50
RSウイルス 感染症	報告数	16	16	8	1		5				2	
	定点あたり	0.44	0.44	0.80	0.17	0.00	1.67	0.00	0.00	0.00	0.50	0.00
咽頭結膜熱	報告数	28	27	7	5	8	2				5	
	定点あたり	0.78	0.75	0.70	0.83	2.00	0.67	0.00	0.00	0.00	1.25	0.00
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	報告数	102	108	31	19	22	2	3	18	2	10	1
	定点あたり	2.83	3.00	3.10	3.17	5.50	0.67	1.00	4.50	2.00	2.50	1.00
感染性胃腸炎	報告数	453	503	70	96	53	61	94	51	11	52	15
	定点あたり	12.58	13.97	7.00	16.00	13.25	20.33	31.33	12.75	11.00	13.00	15.00
水痘	報告数	29	32	10	2	9	4		1		4	2
	定点あたり	0.81	0.89	1.00	0.33	2.25	1.33	0.00	0.25	0.00	1.00	2.00
手足口病	報告数	21	13	7	5				1			
	定点あたり	0.58	0.36	0.70	0.83	0.00	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00	0.00
伝染性紅斑	報告数	7	25	12		1	12					
	定点あたり	0.19	0.69	1.20	0.00	0.25	4.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
突発性発しん	報告数	29	30	9	3	4	4	1	3		5	1
	定点あたり	0.81	0.83	0.90	0.50	1.00	1.33	0.33	0.75	0.00	1.25	1.00
ヘルパンギーナ	報告数	6	3	1		2						
	定点あたり	0.17	0.08	0.10	0.00	0.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
流行性耳下腺炎	報告数	9	6		1		5					
	定点あたり	0.25	0.17	0.00	0.17	0.00	1.67	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
急性出血性結膜 炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00						
流行性角結膜炎	報告数	26	33	32		1						
	定点あたり	4.33	5.50	10.67	0.00	1.00						
細菌性髄膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
無菌性髄膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
マイコプラズマ 肺炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
クラミジア肺炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
感染性胃腸炎 (ロタウイルス)	報告数		1						1			
	定点あたり	0.00	0.14	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.00		0.00	

インフルエンザ定点:59、小児科定点:36(インフルエンザ定点を兼ねる)、眼科定点:6、基幹定点:7

上段:報告数
下段:定点あたり報告数

全数把握対象疾患累積報告数(2018年第1週～51週)

2類感染症	結核	161例(4)				
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	39例				
4類感染症	E型肝炎	3例	A型肝炎	22例	重症熱性血小板減少症候群	12例
	つつが虫病	57例(2)	デング熱	1例	日本紅斑熱	19例
	レジオネラ症	7例	レプトスピラ症	2例		
5類感染症	アメーバ赤痢	1例	ウイルス性肝炎	7例	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	14例
	急性弛緩性麻痺	5例	急性脳炎	7例	クロイツフェルト・ヤコブ病	2例
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	4例	後天性免疫不全症候群	7例	侵襲性インフルエンザ菌感染症	3例
	侵襲性肺炎球菌感染症	24例(1)	水痘(入院例)	2例	梅毒	9例
	播種性クリプトコックス症	5例	破傷風	4例	百日咳	309例(10)
	風しん	3例				

()内は今週届出分、再掲

感染症流行予測調査事業の一環として、2018/2019年のインフルエンザ流行シーズン前における県内の抗体保有状況調査を宮崎県健康づくり協会および県立宮崎病院の協力を得て実施した。

調査では、9年年齢群・250名（0～4歳：59名、5～9歳：16名、10～14歳：25名、15～19歳：24名、20～29歳：42名、30～39歳：25名、40～49歳：26名、50～59歳：17名、60歳以上：16名）から同意を得て、2018年7月2日から8月31日に収集した血清を対象とした。また、下記の4抗原（今シーズンのワクチン株）を用い、赤血球凝集抑制抗体（HI抗体）価の測定を行なった。

- 1 Aパンデミック型：A/シンガポール/GP1908/2015（H1N1）pdm09
- 2 A香港型：A/シンガポール/INFIMH-16-0019/2016（H3N2）
- 3 B型：B/プーケット/3073/2013（山形系統）
- 4 B型：B/メリーランド/15/2016（ビクトリア系統）

[調査結果]

感染防御に有効と考えられる40倍（1:40）以上の抗体保有状況は以下のとおりであった。また、80倍（1:80）以上及び160倍（1:160）以上の抗体保有状況も併せて図に示した。

- 1 Aパンデミック型：A/シンガポール/GP1908/2015（H1N1）pdm09に対する抗体保有状況
10～14歳群で比較的高い保有率（52.0%）を示し、5～9歳群及び15歳～39歳の各年齢群で中程度の保有率（28.0～37.5%）であった。0～4歳群及び40歳以上の各年齢群では比較的低い保有率（10.2～18.8%）であった。
- 2 A香港型：A/シンガポール/INFIMH-16-0019/2016（H3N2）に対する抗体保有状況
10～14歳群で比較的高い保有率（40.0%）であった。5～9歳群及び15～29歳の各年齢群で中程度の保有率（28.6～37.5%）を示し、0～4歳群及び40歳以上の各年齢群で比較的低い保有率（10.2～17.6%）であった。30～39歳群では極めて低い保有率（4.0%）であった。
- 3 B型：B/プーケット/3073/2013（山形系統）に対する抗体保有状況
20～29歳群で高い保有率（64.3%）を示し、10～14歳群及び50～59歳群で比較的高い保有率（44.0%、47.1%）であった。15～19歳群及び30～49歳の各年齢群で中程度の保有率（34.6～37.5%）を示し、0～9歳の各年齢群及び60歳以上の年齢群で比較的低い保有率（11.9～18.8%）であった。
- 4 B型：B/メリーランド/15/2016（ビクトリア系統）に対する抗体保有状況
40～49歳群で高い保有率（61.5%）を示し、50～59歳群で比較的高い保有率（47.1%）であった。10～14歳群で中程度の保有率（36.0%）を示し、15～39歳の各年齢群及び60歳以上の年齢群では比較的低い保有率（11.9～16.7%）であった。0～4歳群で低い保有率（8.5%）を示し、5～9歳群では抗体保有率は0.0%であった。

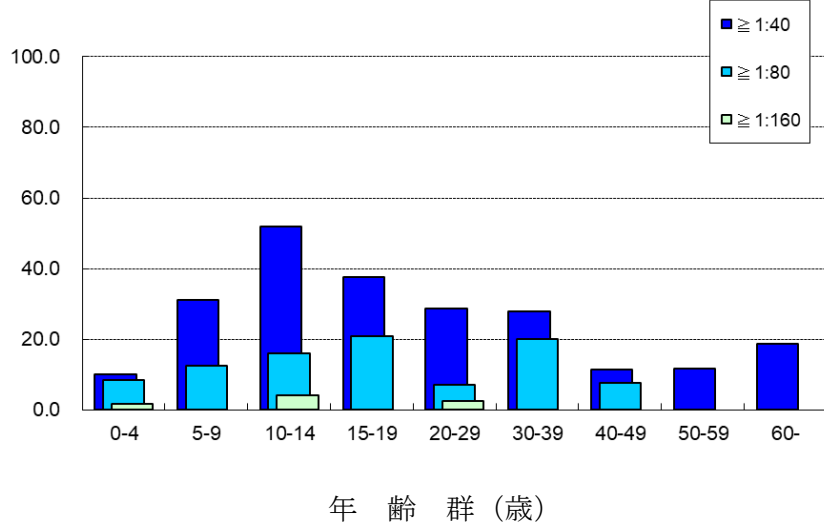
[コメント]

2017/18シーズンは、全国の定点医療機関あたりの報告数のピークが2018年第5週に54.3になり、1999年の感染症法施行開始以来最高値となった。本県でも2018年第3週に定点医療機関あたり85.0になり、インフルエンザの流行のピークを迎えた。全国的に分離・検出されたインフルエンザウイルスはB型（山形系統）が最も多く、次いでAH3亜型、AH1pdm09亜型の順であった。また、本県で分離・検出されたインフルエンザウイルスは約4割がB型（山形系統）と最も多く、次いで、AH3亜型、AH1pdm09亜型の順となり、全国と同様の結果となった。

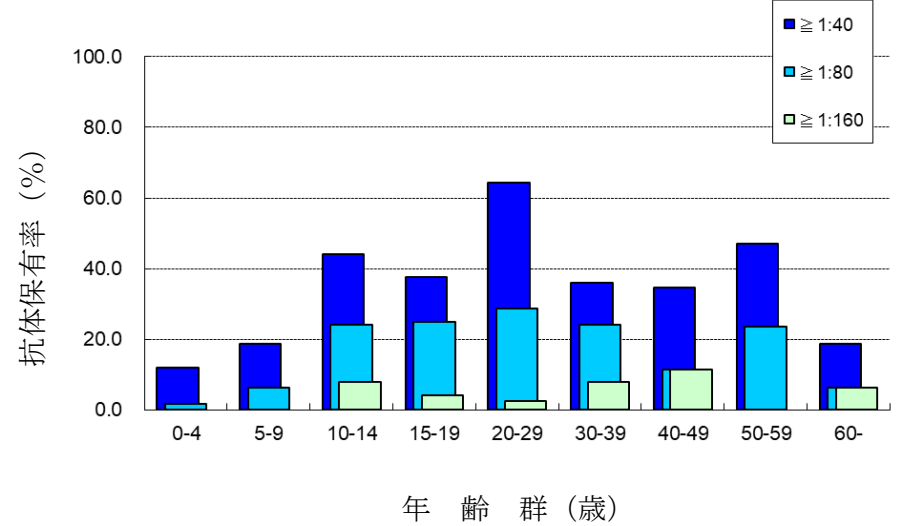
2018/19シーズン前の40倍以上の抗体保有率はAH1pdm09亜型、AH3亜型及びB型（山形系統）において前年度と比べ、全体的に低い傾向になっている。B型（ビクトリア系統）は前年度と比べ40～59歳の年齢層で高い保有率を示しているが、その他の年齢層では大きな変化はみられなかった。

病原微生物検出情報によると、全国のインフルエンザウイルス検出状況は、AH1pdm09亜型が優位となっており、次いでAH3亜型、B型の順となっており、全国的にインフルエンザの流行シーズンに入った。本県でもインフルエンザの流行シーズンに入り、報告数が増加しているため、ワクチン接種や手洗いなどの予防対策をとることが重要である。

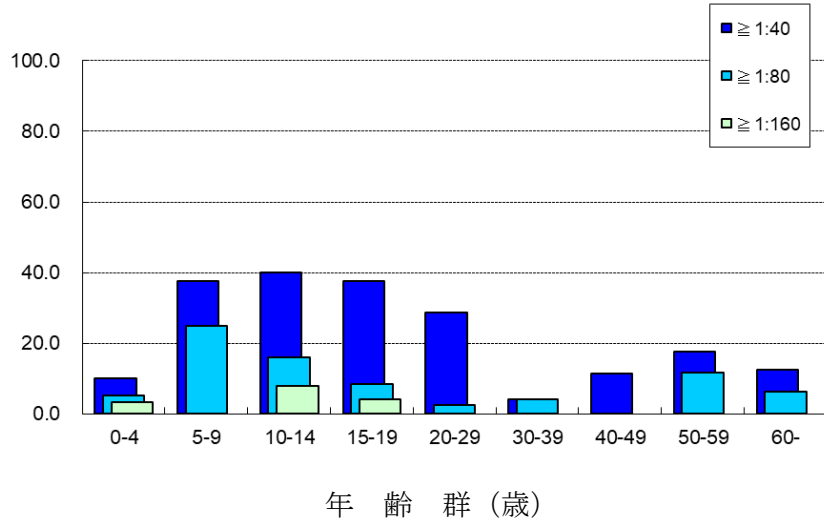
A/シンガポール/GP1908/2015 (H1N1)pdm09



B/プーケット/3073/2013 (山形系統)



A/シンガポール/INFIMH-16-0019/2016 (H3N2)



B/メリーランド/15/2016 (ビクトリア系統)

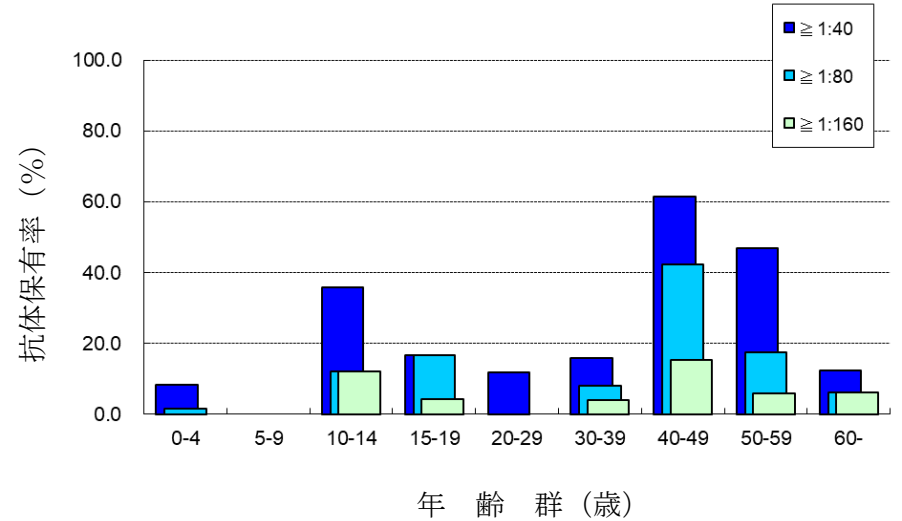


図 宮崎県における年齢別HI抗体保有状況(2018/2019シーズン前)